



公益社団法人  
**日本美術教育連合**  
**ニュース**

No. 134  
2012. 3

〒113-0033 東京都文京区本郷 2-30-14 文京ビル 206 号  
公益社団法人 日本美術教育連合

発行人 理事長 宮坂元裕  
ニュース担当 北川智久

E-Mail: kitagawa@elementary-s.tsukuba.ac.jp

## 実践研究の意味

公益社団法人 日本美術教育連合理事 大坪圭輔

文部科学省による平成23年度学校基本調査が、昨年末の速報に引き続き、先頃発表になりました。全国の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校の数は、5万2千校に近く、その児童生徒数は、1555万9千人余り、本務教員数は109万7千人余りとなっています。少子化によって縮小傾向にあるとは言え、学校教育はやはり巨大なシステムであり、社会の根幹であることに違いはありません。そして、これだけの巨大なシステムが健康に働き、発展し、質を高めて行くためには、様々な分野からの研究や検証が必要であることは言うに及びません。また、上記の幼稚園から特別支援学校までの学級数は56万6千近く存在します。少人数授業などもありますから実際にはもっと多くなるかもしれませんが、毎時間全国で56万以上もの多種多様な授業が実施されていることとなります。学校教育とは、まさにこの膨大で多彩な授業の蓄積であり、56万以上の教室で毎時間生まれる学びであると言えます。

ある学会や研究者の中には、この授業の現場を対象とする研究を「教育臨床研究」と称しています。教室の状況を外部から客観性を持って検証するという立場から「臨床」の言葉を充てているわけですが、私は未だにこの言葉には違和感があります。また、授業を含む学校現場を研究のフィールドと言うことにも抵抗があります。これに対して、授業者が自らの授業実践をもとにして、教育方法や教育技術の改善のみならず、新たな教育理念を切り開こうとする研究が「実践研究」です。

「教育臨床研究」が数多くの統計やケーススタディーの集積によって、学校教育全体を検証しようとするのに対して、「実践研究」はそこで展開されるひとつの授業実践から、全国56万の教室の授業を考えようとするものです。また、これによって学校教育の最前線である授業が公開され検証されることは、公教育としての責任でもあります。教育は社会の状況に応じて変化し改革されるべきものですが、そこには毎時間の授業を問う「実践研究」を通しての視点がもっと大切にされるべきではないでしょうか。

## ■ 予 告 ■

公益社団法人日本美術教育連合 第2回 通常総会は、平成24年4月22日（日）に開催いたします。会場は、**聖心女子大学 400番教室**（東京都渋谷区広尾4-3-1 日比谷線広尾駅が最寄り）で、総会は午後1時30分からとなります。多数のご出席をいただけますよう、よろしくお願いいたします。

## 「造形・美術教育フォーラム2011」報告

テ ー マ これからの美術教育に期待することと公益法人にできること

パネリスト 高橋 香苗 (東京都図画工作研究会会長)  
東良 雅人 (文部科学省教育課程課教科調査官)  
水島 尚喜 (聖心女子大学教授・コーディネーター)

開 催 日 2011年11月13日  
会 場 武蔵野美術大学新宿サテライト  
参 加 者 42名

### 初めの挨拶 (理事長)

宮坂：「造形・美術教育フォーラム2011」をはじめます。本日のパネリストを水島先生に一任しましたところ、東京都図画工作研究会会長高橋先生と文部科学省教科調査官東良先生と水島先生との鼎談ということになりました。テーマは、「これからの美術教育に期待することと公益法人にできること」です。その中でも小・中学校それぞれの、これからについてお話しいただきたいと思います。「公益法人にできること」については私たち会員の考えることです。

会場をお貸しいただいた武蔵野美術大学および本連合理事、大坪先生に感謝申し上げます。



水島：お二人の先生は今年度から、美術教育界の新しい舵取り役としてご活躍です。今日は会場の皆様とともに、今後の美術教育について協同的に考えていきたいと思っています。最初に水島から近況報告を申し上げます。

2010年11月14日付け朝日新聞の「教える」という教育欄に映画「トントンゴゴゴ工の時間」に関する記事が掲載されました。内容は、イタリア・フィレンツェでの日本映画祭の折に、「トンゴゴ映画」が唯一日本の優れた教育内容として紹介されたというものです。また2010年12月8日の記事では、「国際学力」が取り上げられました。教育の市場原理化がグローバルに進行する中で、図工美術がどう切り込んでいくかが課題です。これらの記事から、近年では造形的なリテラシーや社会的役割の問題が浮上してきていることが理解できます。

そして昨年3月11日に東日本大震災があり、私自身しばらく何も考えられない状態となっていました。その中で、被災した岩手大船渡の越喜来（おきらい）小学校の児童たちが「未来の小学校や街」を描いた、という朝日新聞の記事に出会いました。この記事をきっかけに大船渡に伺いました。被災した小学校に子どもたちの作品を展示できるスペースはありません。唯一屋根が残されたガソリンスタンドが会場となりました。自らも被災された片山さんご夫妻が、子どもたちの未来に向けてプロジェクトし、実現したのです。片山さんからは、そのプロジェクトの経緯を色々とお話いただきました。セラピー的な観点から、あの体験をどのように克服するのかが、課題としてありましたが、子どもたちの想像力は、見事に克服していると感じました。「未来」といいますとSFみたいな町が出てくることがあるのですが、貼られていた絵は、たとえば電気がきて生活できるなど、まさに普通の生活へのまなざしがありました。パン屋さんのおばさんが大好きだった子は、行方不明のおばさんを描いています。及川君はいろいろな友達が学校にきてくれることを願って新しい学舎を描いてくれました。一つ一つの絵に、それぞれの思いがしっかりと位置付いています。そのような活動は、大人たちのボランティア、美大生・造園家などによって支援されていることに、勇気をいただきました。

福島先生と学生も活動していました。福島では、放射線量が高く、子どもたちは外で遊べないのです。ここではそのような状況を克服しようとする福島大学渡邊晃一先生が企画された「アート鯉のぼりプロジェクト」について報告します。（内容略）

その後私は、学生と一緒に北インド／ダラムサラにおいてダライ・ラマ法王にお目にかかることができました。そして法王が、世界中から支援を受けて運営されるTCV（チベット子ども村）を視察いたしました。法王の後を追ってチベットからインドに逃れた子どもたちは、このTCVで学びます。亡命時、5000メートル級のヒマラヤ越えによって凍傷になった子どももいました。そのような子どもたちが一生懸命学ぶ場をみてきました。そこでは、チベット仏教に裏付けられた教育の内容が実践されています。幼稚園では、モンテッソーリ・メソッドが採用され、直感的、感覚的把握が重視されていました。年齢が上がるにつれ高度な学問を身につけていきます。ダライ・ラマ法王も、教育がこれからの世界のキーワードであると発言していました。指導者も子どもたちも、国の未来を背負うという意味で真剣でした。そして仏教と美術と生活が一緒になっています。造形活動を行う子どもたち一人一人の心は世界共通であると

思いました。今の日本が3.11以降、どのような舵取りをすべきかを教えられたような気がしました。

**高橋：**みなさんこんにちは。江戸川区立南小岩小学校に勤務しています。水島先生から都図研の活動と日常の授業について質問がありましたので、まずそれについて話をさせていただきます。東京には1300人の専科がおります。昭和23年に都図研は設立されましたが、現在私達が重要な問題として取り組んでいるのは、団塊の世代の退職の後急激に増えている若手教員をどう育てるか、という課題です。都図研もまた、若い世代と共に新しい時代を作る過渡期にあると言えます。

都図研の活動は多岐にわたります。昨年度（平成22年度）は、新学習指導要領全面実施の前年であり、新学習指導要領の解説書と現場をつなぐものという意図でパンフレットを作成し、都内の全小学校に配布しました。そのような活動もしています。

都図研の研究局は、「子どもにアートが生まれるとき」を継続的な研究テーマとして、長年にわたり研究して参りました。子どもの自発的な造形活動がどのように子どもの成長を支えているのか、授業研究を通して探求しています。研究局もいま、世代交代という岐路に立っています。すぐに目覚しい成果を発表するというわけにいかないが、チームを組んで懸命に切磋琢磨し、検証授業を公開しています。

研修局は「図工で培う力を考える」をテーマに、様々な研修を組んでいます。参加した先生方が、子どもの姿として、図工の大事な部分をわかるような研修を目指しています。実際の授業を通して「子どもの活動の意味や子どもの変容する姿」を自分の目で見て感じながら、図画工作の授業について考える研修となるよう、努力しています。題材の単純なノウハウやコピー題材を提供しない、ということです。（映像略）

子どもは造形活動の中で、それぞれの瞬間に、いままで知らなかった世界や自分に出合っているのです。最近の学校は「早さ」「能力」などが重要視され、「表現することそのものの中に、子ども達の成長を支える大切な時間がある」ことを、忘れ去っているように感じます。図工の時間の中で子ども達が体験する時間や行為、その量や質そのものに価値があると、私は思います。

今の子ども達は、ものにまみれ、ひらめき、楽しさや喜びにあふれる時間が本当に少ない。情報化社会の中で生きている大人は、実は身体全体を開放し、ものにまみれ、試行錯誤する時間を必要だと思いつつも、心の奥で恐れているのではないかと、私は時折そう考えます。だからこそ大人たちに、子どもの表現活動を知ってもらうことは、本当に大切です。

子ども達は、表し方は稚拙であるかもしれないが、大人顔負けに、描きつくりつつ考え抜きます。表す中で友だちと深く関わり、価値を共有することができます。その年齢にふさわしい方法で、その時ならではの表現を積み重ねることは、欠けてはならない大事なものです。心を開いて描きつくすることで、家庭の事情で悩む辛い時間を、乗り越えていくこともあります。そのような中で子どもたちは成長していくのではないのでしょうか。

授業研究を通して、若い先生に子ども達が何を体験しているか、描きつつ何を考えているのかを見とれる先生になって欲しいのです。授業は生き物です。それぞれの子が自分の能力を発揮できるよう、寄り添っていきたいです。

都図研は、長い間このような理念で活動してきましたが、気づいたら、いまや学習指導要領の理念に一番近い研究をしていることに驚きを感じます。有り難うございました。



**水島：**高橋先生からは、都図研と子どもの表現をめぐって大変貴重なお話をいただきました。続きまして東良先生、お願いもうしあげます。

**東良：**私は京都市教育委員会指導主事から、H23に文部科学省に異動しました。京都にいる間、中学校の美術教師と小学校の図画工作科の専科をしておりました。特に小学校での勤務は大変有意義な経験でした。今年から中学校・高等学校の美術、工芸を担当する教科調査官をしています。

図画工作や美術は表現や鑑賞の活動を通して、子どもたち一人一人が「自分の世界観をひろげる」機会をつくります。その中で自分を見つめ、他者理解を深めます。そして、子どもたちが、まわりの子どもたちを変える、そして、大人を変えることにつながっていくのだと思います。このような大切な営みが美術の関係者だけでなくそれ以外の人も美術は必要だと言ってくれるようになることを願っています。そのためには、図画工作、美術で育成する資質や能力を明確にし、子どもたちがもっている力を存分に発揮できるような授業づくりが大切だと思います。

ます。

いくつか授業を紹介したいと思います。小学生の授業ですが、自分たちの街の中ですてきな色を見つけるとい授業です。子どもたちは街で見つけたお気に入りの色の組み合わせを写真に撮り、教室に戻って気に入った理由などを書いて、友達に説明し合います。同じものでも「すてき」の理由がちがうのです。活動の中で、他の児童の説明を聞き、自分とは違った見方や感じ方と出会い、自分の見方や感じ方を広げることにつながっていきます。（画像・メモ省略）その経験をもとに、町にあったらすてきなだと思パネルを制作します。そのときに、子どもたちが、どんな力を発揮していたかお見せします。（映像略）子どもたちは感性を働かせてそれぞれの「すてきな色」という対象を選び、表現しています。

次は北海道の中学生の実践です。「心のかけ箸」という題材です。単にお箸をつくるのではなく、「誰のための」お箸なのかを明確にして発想や構想し、制作します。完成したお箸は家族に渡すだけでなく、家族に使ってもらったり、コメントをもらったりすることで表現を通して人と人とのつながりが生まれます。

次に、新しい学習指導要領についてお話しします。

私は教師になったはじめの頃のやっていた授業は自分自身が子どもの頃に学んでいた授業がお手本だったように思います。でも学習指導要領はその時代その時代の社会の背景や子どもたちの実態に応じて改訂され変わっていくものです。新しい学習指導要領の趣旨やねらいにもとづいて目の前の子どもたちに図画工作、美術を通してつける力は何かを起点に授業づくりをしなければなりません。

今回の学習指導要領を改訂するにあたって、改善の基本方針が示されました。改善の基本方針の文面に（画像）「その課題を踏まえ」とあります。改訂の趣旨を理解するためには「その課題」とは何かを知ることが大切です。今回示された課題は、一つは、感性を働かせて思考・判断するなどの一連のプロセスを働かせる力を育成することです。二つ目は子どもの興味関心の高まりが資質能力の向上に生かされていますかということです。三つ目は生活の中で美術に親しみ、生かしたり、豊かにしたりする態度の育成です。四つ目は表現の活動だけでなく、自分なりの意味や価値を生み出す鑑賞の活動の充実です。五つ目は従来から言われている我が国や諸外国の美術作品のよさや美しさを感じ取る学習の充実です。これが小学校から高等学校までの課題としてあげられています。評価の観点から見ると図画工作、美術では内容の枠組みは違うけれど、評価の観点の基本的な考え方は同じです。評価は指導したことの実現状況を見取るものですから、育成する資質や能力は一貫しているのです。

育成する資質や能力について中学の例をお見せします。「自分の気持ちを入れる器」（中2）この作品は気合いを入れる器、勇気をいれる器という作品です。これは器ですが用途から発想や構想をするのではなく、自分の感じ取ったことや考えたことから主題を生み出し、発想や構想をする作品です。（映像略）もう一つ別の題材です。この題材は陶土をつかったという意味では同じですが、学習のねらいは違います。こちらは使う人の立場から発想や構想をする器です。このように教材が同じでも学習のねらいによって育成する資質や能力は異なるのです。

「使用者の気持ちを考えた発想や構想」と「感じたことや考えたことを基にした発想や構想」では学習のねらいが違います。単に「次の授業では陶芸をやろう」ということだけを出発点に授業づくりをすればこのような違いは出てきません。活動を通して身につける力から授業をつくっていくことが大切です。

#### (5分間休憩)

## 第2部 これからの美術教育にむけて

水島：後半に入ります。お三方に現況について話していただきましたが、では今後の展望は、という点でお話しいただきたく思います。

最近では、本来国がやってきた各種内容が民間へ移行しつつあります。そこで一つ例をお話しします。アーティストの田窪恭治さんは、家族とともにノルマンディーに移り住み、リンゴの礼拝堂と呼ばれるサン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂を再生するプロジェクトに取り組みました。個人の思いからスタートしたこのプロジェクトは、やがてフランスや日本の政府をも動かすこととなります。これは単に古い礼拝堂を再生させることが大切なのでなく、その地域や人などいろいろな方を巻き込み、そのなかで行われたことに意味があったのだと思います。田窪さんからは、「風景芸術」という考えを伺いました。人間の生きる短い時間を、その環境や風景の中に埋め込んでいくことが風景芸術となるというお話です。「未来に向けてお互いに豊かになろうよ」というコンセプトで、活動されたそうです。その後、日本の金比羅さまでやはり10年近くレジデンスの活動を行い、また今後は東北支援に向けて構想をされているようです。

さて、公益をどう考えるかといいますと、不特定多数の利益にあたるものが公益となるということです。健全な意志に基づいて事業を行い、それを社会に還元していくのが公益ということではないかと思います。

今回の震災以降、「公益」についての意識が高まったのではないかと。そして「贈与」的観点から、「無償の愛」というかそれを信じて行う機運が高まったのではないかと。あらゆる領域において「贈与性」ともいいかえられる「公益性」をどう考えていくかが今後の課題となると思われれます。

東良：平成23年3月に特定の課題に関する調査を公表しました。調査の中で質問紙調査を行いましたので、少しそこからお話しいたします。質問紙調査の中で「図画工作、美術の学習は「好きですか」という質問や「図画工作、美術の学習は大切だと思いますか。」という質問に対して肯定的な回答が否定的な回答を上回っています。しかし「普段の生活に役立っていると思いますか。」という質問では「好きか」といった質問や「大切か」といった質問に比べて肯定的な回答が下がります。この質問紙調査の結果が全てを示しているわけではありませんが、こう

いう調査結果も参考にして、これからの図画工作や美術の授業の在り方を考えることも大切だと思います。

**高橋**：3.11以降、美術教育にはいま何ができるのかを考え続けました。

図画工作は、喜びを持って活動しながら子ども達の変容をとげる、すぐれた可能性をもった教科だと思います。しかしそれはどのようにして働くのか？気になります。身体と感情と無意識を揺り動かすからなのか？心を開き、繋がるのはなぜか？

図画工作は正解のない学習です。いまの子どもはマニュアルがないとできないと言いますが、子ども達は実際には自分ひとりで、図工の方法（色や形）で、深く考え抜くことができる。正解を求めるといのは学校教育の必然ですが、この教科は異なります。子どもが自分自身の力を働かせて、自分の意味を作り出すことを目的としています。自発的な造形活動が行われ子どもが活動に夢中になる。そのとき子ども達はよく「あっ、いいことおもいついた。」と声に出します。この、ひらめきとはなんだろう？これは長い間の疑問でした。以前、『子ども主義宣言』という本を編集した時に、私は茂木健一郎氏にインタビューで尋ねましたが、「ひらめきとは、学習である。」と話されました。「ワンショットラーニング（一発学習）」なのだそうです。なぜ学習といえるかという、その前と後とは、脳の仕組みが変わり、二度と元にもどらない。だから学習なのです。

ひらめきは喜びです。作りたいことが次々と浮かぶと、子どもたちは熱中します。その姿を観察していると、子ども達の変容にも気づかされます。作品もさることながら、子ども自身が変容し成長しているのだと感じます。





## 【 質 問 】

山口 荘一（元東京都）：特定課題調査の結果を拝見致しました。今後これはどのように役立たせて行くのですか？数字は一人歩きすることもありますので。

東良：これですべてが測れるものではありません。大切なことはこのような調査結果を活用してどう指導の改善に生かすかにあります。是非、指導の改善に結びつけてほしいと思います。

高橋：私はあのデータをみて、「こんなにも多くの中学生が、自分の思ったとおりに描きたい。」という欲望を持っているだと、逆に思いました。

コミュニケーションについては、いつも北川フラム氏の「教育は美術的である」という言葉を思い出します。コミュニケーションは美術の十八番です。

東良：全ての子どもたちにとって大切な学習だと、全ての人が思える教科にしなければならないと思います。ペーパーテストだけでは見取ることのできる資質や能力と見取ることのできない資質や能力があります。しかし、見取れない部分には子どもたちにとって大切なことも多くあると思います。今まで積み上げてきたことを大切にしながら、これからの社会を見据えて一層の充実を図ることも大切です。そのためにみなさんと力を合わせてがんばっていきたいと思います。

（拍手）

## 終わりの挨拶（理事）

榎原：今日は有り難うございました。多くの方にご参会いただき感謝申し上げます。美術教育というのは可能性が大きく開かれていると考えます。子どもたちが友達と一緒に活動する、そこから生まれてくる活動にいろいろな可能性をとらえることができます。例えば埼玉大学附属特別支援学校では「交流学習から、共同学習へ」をテーマに研究をしましたが、そのときの授業は図工でした。多くが自閉症でしたが、健常児と同じ空間の中で活動していること自体に意義があり、そこが出发点であると、その時感じました。

美術教育の可能性をどんどん広げていっていただきたいと思っております。

おわり

（記録：西村德行）

（撮影：山口喜雄）

## 造形・美術教育実践セミナー 報告

今年度の中学校美術科授業研究会は、昨年と同様に日本美術教育連合と埼玉芸術文化教育研究会との共催で、11月22日（火）に行われました。趣旨は、「新学習指導要領における表現、鑑賞の活動を豊かに展開し、内容を充実させるための題材及び指導の方法を研究する。」というものです。今回、協力いただいた授業者は、埼玉県北本市立東中学校の島崎晴美教諭、参加者は、10名でした。日本美術教育連合からは、宮坂理事長、榎原理事が参加しました。当初は、もう少し参加が見込まれていたのですが、火曜日と言うことや、学校行事その他いろいろ時期的な問題があったようです。

北本市立東中学校は、高崎線北本駅から20分のところに位置し、校長の町田先生は、芸術、芸術教育にご理解があり、いろいろとご協力ご指導を賜りました。校舎が改装中でしたが、本授業研究会のために視聴覚室を利用できるようご協力いただきました。

生徒たちが、新装なった視聴覚室に入ってきて福田繁雄の作品が目に入ってくるや歓声が上がリ、また、普通教室のイスと違って座り心地のよいイスに喜んでいました。

### (1) 研究授業

題材名は、「福田繁雄のユーモアの世界」で、3学年を対象に鑑賞の指導がおこなわれました。視聴覚室には、福田繁雄のポスターがイーゼルに置かれ、また壁にも貼られていました。

「本題材は福田繁雄のグラフィックデザインの世界に親しみ、視覚伝達デザインによるビジュアルコミュニケーションを味わう活動である。生徒一人ひとりがデザインの遊び心やユーモア、仕掛けなどの第一発見者となって獲得していく楽しさ、喜びを得られるようにしたい。」（学習指導案より）

目標は、

- (1) 主体的に遊び心やユーモアのデザインに触れ、作者の心情や意図について感じたことを発信し合い、それぞれに異なった見方や感じ方を認め合おうとしている。（美術への関心・意欲・態度）
  - (2) 作品などに対する自分の考えを述べ合うことで、今まで気がつかなかった視点や価値に気づき、生活を心豊かにするデザインのはたらきについて理解を深めている。（鑑賞の能力）
- としています。

島崎教諭は、まず生徒たちをイーゼルに置かれたポスターや壁に貼られているポスターに注目させました。次に、自分が夏休みに三重県立美術館で福田繁雄の展覧会を観てきたことなどを話し、「福田繁雄のユーモアの世界を楽しみ、ユーモアとデザインとの関係について『謎解き』をして、それぞれの作品からどんなメッセージを読み取れるかなどを探してほしい」と言って、生徒たちの関心をその方向に向けました。

生徒たちは、班に分かれて、それぞれ自分たちの班で取り上げたいポスターを選び班に持ち帰り意見を出し合いました。

それぞれ意見を出し合った後、生徒が見たままの色と形を「青い紙」に書き、「黄色い紙」には、自分なりのイメージや疑問・謎などを書きました。

班で意見を出し合った後、二つの班から、班で話された内容などが発表されました。ひとつの班は、爆弾は「こわいもの」、どくろは「死のイメージ」と受け取ったこと、もうひとつの班は、バラ鉄線の手との握手は、平和を訴えているのではないかという感想をもったことなどを発表しました。



最後に、島寄教諭から、福田繁雄の作品の世界について、そのしかけ、だまし絵、遊び心などがスライドを通して紹介されました。

## (2) 研究協議会より

**司会（榎原）** 最初に授業者から今日の授業について、ご説明をお願いします。

**島寄** いろいろと考えたが、最終的には生徒を歓迎する、迎え入れる雰囲気を演出した。慣れない場所であったが、いつものようなごやかな楽しい表情を見せてくれ、そのなかで、授業のねらいに迫ることが出来たと思う。

美術的な価値ということでデザインとユーモアとのつながりについてこちらが一方的に話すのではなく、生徒から引き出すと言うことだが、1時間ではむずかしいこともあり、今回取り上げられなかった。ふたつのねらいのうち、批評し合うということを大事にした。

鑑賞カードは、トランプ状のものを用意していたが、インパクトとか見やすさとかということから、大きなポスター印刷で行うというアイデアをもらい、それで行ったことはよかったと思う。手もとにおいて、みんなで一緒に見られる大きさであったことがよかった。

このような鑑賞授業は初めてだった。10年次研修、指導課訪問を経て今回の研究授業に至っている。きょうは、授業実践等について、いろいろとご指導いただければありがたい。

**A** 昨日訪問して準備状況を見させてもらった。この教室に通された時、さらな状態で、非常によく整理されていて、また座り心地のよいイスなどとてもよかった。雰囲気が子どもに伝わったのではないか。とりあげるポスターについてどれが一番よかったか。こっち（握手の図）の方が話題がもりあがったのではないかと思った。が、生徒たちは、関連を見比べていて、壁の掲示もよかったと思う。

**宮坂** 島寄先生に質問だが、夏休みに三重県立美術館に行ったことがこの授業の動機なのか？ そのとき、福田繁雄の何が一番おもしろいと思ったか。

**島寄** 「これは中学生の鑑賞の題材に使えるそうだな」というところから始まっているが、立体について、ある角度から見ると〇〇に見えるなど興味をもった。

**宮坂** きょうは、その部分を外していた。なぜ、外したのか？ 先生が一番興味をもったことに子どもは興味をもつ。福田繁雄の作品は中学生に向いていると思う。たとえば、あのオートバイ、「これ全部スプーンだよ」というと、「えっ」と言う。近づいて見るとスプーンに気付く。猫、立たせるとネズミ、横に寝かすと猫。そこに集中する。



この3つの作品は、小学生向き。教師は「おかしくないか？」というだけでよい。みな（小3～小6）「おかしい」という。「どうして？」という。いろいろと答える。

きょうの授業のねらいから外れるものは掲示しっぱなしではなく、オートバイ、モナリザなどは、しまった方がよい。

福田繁雄の作品は、いくつもの違うステージに分かれている。ここには三重か四重の意味が込められている。まず1945年—なぜ1945年なのか、次に、VICTORY—なぜ勝利なのか、そして、なぜ黄色なのか、この次の瞬間どうなるの

か、この弾は、入ってくる場所か出て行く場所か、大砲に見えるけれども本当に大砲かなど、子どもたちは、この一枚で相当のところまで突っ込んでいける。教師が知っていて子どもが何も知らないという授業でなく、教師は何も知らなくてもその質問だけを用意しておくだけでよく、子どもと一緒に学んでいくことができる。

今日の授業は「選ぶ」と言うことであつたが、それはそれで面白い。今日の授業は失敗していない。事実と自分の感覚とを二枚の紙に分けて書いている。ここからどう深めていくかというとき、福田繁雄にもどって考えると、なかなかよい授業になるのではないか。

握手しているこれらの絵は、見ると何でもないように見えるが、ものすごく複雑なステージをもっている。花束を二本の手でもっているピカソが描いた絵はがきがヨーロッパで売られている。ひとりの人間が持っているように見えるが、よくみると両方とも右手である。右手と右手ということで、二人の人間がもっていることに気付く。発見した時に感動がある。それから発想したのではないか。この握手している作品は、右手と右手であり、この場面の外に対立した関係にある二人の人間がいる。バラ鉄線の手は、図と地の関係で、二つの見方ができる。背景の赤い色、バラ鉄線だと血が流れるが赤い色だと血は見えない。そこに気付くと、イスラエル辺りの常に戦争をしているところが「握手をする」ということはむずかしいことである、というメッセージが読み取れる。

高校生に授業をする時は、この一枚で相当深く読み取れる。小学生から高校生まで、つぎつぎに疑問がわいてくる。それをここに示したことはいろいろな可能性があり、これひとつで相当な授業が考えられる。

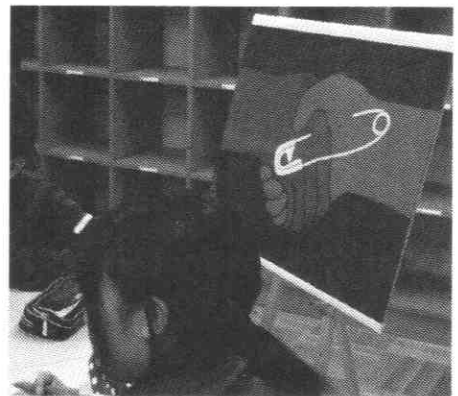
- B きょうはありがとうございました。教室に入ってくる時に子どもたちから歓声が上がった。以前見せてもらったのは、手のひらサイズの鑑賞カードだったが、きょうは、ポスターサイズで掲示され迫力があり、子どもたちの会話も盛りあがってよかったと思う。

班の話し合いでは、謎解きが途中で止まっているような状況もあつたが、班ごとにいろいろな見方があつてよかった。「いろいろな意見があつていいんだよ」と言う教師の言葉が、話し合いの盛りあがりをつくった。最後に解答が欲しそうな顔をしている生徒もいた。

赤や青のはっきりした色や「安全ピン」などを通して生徒たちは人種問題などいろいろ考えていた。みんなに発表してもらいたいくらいいろいろな考えが出ていた。

- C 鑑賞の授業では、教室の壁に何も貼っていないのがよい。今日の教室は、目に飛び込んでくるものが、今日の授業に関係あるものでよかった。生徒たちはこちらが思った以上に話し合い、深いところまで読みこんでいる。班でしゃべれない生徒がいなかった。ある程度まで行ってそこからどうステップ・アップできるかということがきょうのポイントなのかと思った。

疑問に思ったのは、大砲のポスターを最初に10分間使う予定だったがそれがなかったこと。1945年、砲弾の向き、VICTORY、それらの謎解きがあつて、その後それぞれの班



で深く読めるようになる。班ごとにまわって指導したが、途中で一回止めてスキルアップすること  
も必要だったのではないか。どこかの班の話し合いを紹介したり、他の班からも意見をもらったり  
するともっと深まったと思う。一回止めて次のステップにうつるチャンスがあったように思う。

授業の最後で、福田繁雄のスライドを見せるよりも、班がそれほど多くないので、それぞれの  
班に一言ずつ言わせてあげてもよかったのではないか。または、教師から、その班が気付いたこ  
とを知らせてあげてもよかった。クイズのまままで終わった感があるが、完全な答えでなくても、  
一步踏み込めるような一言があると福田繁雄が心に留まるのではないか。今回は、福田繁雄の表  
と裏の世界をよみとる、表面的にはこれ、その背後にはこれこれのメッセージがあるというよう  
に。きょうのねらいは、そこにあった。でも、生徒たちはかなりそれに近い話し合いをしている。  
教師から話してあげるにより、生徒はさらに納得していける。

- D 青いカードと黄色のカードに事実とイメージを分けて書いたことなど工夫がなされていた。鑑  
賞の授業はなかなかむずかしいが、最近、鑑賞の授業をどう表現に生かすか、という問題があ  
る。一学期にポスターのデザインをやっているようだが、今日の授業の後これを生かして表現の  
授業をやっていくのかどうか。表現と鑑賞とが並び合っていくということが大切だろう。

(この後、現行学習指導要領におけるデザイン分野の問題について議論が展開しましたが、省略  
します。)

司会 最後に一言ずつ…。

- A 班の人数がすこし多かったかなという感じ。また、グループ活動は、他のグループの考えが分  
かりにくいので、みな考えが分かるように工夫することが必要だろう。よい意見をピックアップ  
することも大切。
- B 私は、独立した鑑賞の授業は苦手だが、ポスターの大きさという観点から見ると、グループの  
子どもたちの会話がはずんだ。和気あいあいとやっていた。
- C 福田繁雄の作品は、見たとき面白い。しかし、見ているだけだと、そのときは感動するが、仕  
掛けが分かると、感動がだんだん薄れていく。しかし、自分が作る立場になると変わってくる。  
立場を変えると面白いと感じ取る部分と、これから自分もやっていくとき構想にかかわってくる  
部分がある。異文化に接してただ感動し消えるだけでなく、メッセージを読み取り、背後にある  
世界を理解することが必要だ。
- D いろいろなことをするには、美術の授業時数は少ない。

宮坂 題材名は「鑑賞—福田繁雄の世界」のほうがよかったのではないか。「ユーモア」とすると  
むずかしい。“複雑な思いを込めた福田繁雄の世界を探検しよう”という方がよいと思う。福田  
繁雄を「ユーモア」と捉えると、ラベリングになってしまう。福田繁雄を正しく伝えることが大  
切だ。

司会 最後に授業者から。

島崎 きょうは、ありがとうございました。美術教師としてどの生徒にもその生徒にあったふさわ  
しい接し方をしたいと思うが、未熟な部分が出てしまうことがある。きょう、先生方からいろい  
ろのご助言を得て、充電してがんばりたいと思いました。

司会 どうもありがとうございました。

文責 榎原弘二郎（日本美術教育連合理事）

研究局長 山口喜雄 (宇都宮教育大学)

本研究局は、日本美術教育研究発表会の企画・運営・総括、『日本美術教育研究論集』の企画・編集・発行という二大業務を行っています。前者は、東京家政大学の結城孝雄会員の尽力により同大学120周年記念館を会場として、参加役員の連携により全日程を計画通りに実施いたしました。会場近隣の洋風レストランでの懇親会参加の約30名全員が感想や意見を述べ合いました。後者は、編集委員会で「研究ノート」の位置づけ他の検討を行い、例年通りの年度内刊行を企図しています。

### 1. 90名参加・24組発表の2011年度研究発表会

第45回日本美術教育研究発表会は、約90名の参加者を得て開催されました。発表者は例年に近い25組の応募があり、健康事情で欠席の1名を除く、下記の24組による研究発表が行われました。今回の発表の特徴は、1) 南は佐賀・福岡から北は地震・津波・原発で被災した宮城や福島まで、2) 年齢的には90歳代の名誉会員から20歳代の学部4年生まで、3) 中国からの留学生等36% 9名の女性を含み、4) 小・中・高・短大・大の現職教員や院生が、理論・実践研究、実践研究報告・研究ノート等の多様な研究主題で行われたことです。次回は斯界のさらなる発展のため、今年度を上回る多数の会員及び一般の皆様の参加、より質的に高い発表が行われるように切望いたします。

#### 第45回 日本美術教育研究発表会発表者

2011年10月16日(日)実施

|   | 発表会場 A  | 発表会場 B  | 発表会場 C   |
|---|---|---|--|
| 1 | フランス芸術教育の現状と課題<br>東京家政大学<br>結城孝雄              | 自分の背景画を描くワークショップ<br>川口短期大学<br>木谷安憲                                    |  |
| 2 | 幼児の図形の見立てと「顔」の結びつき<br>和洋女子大学<br>島田由紀子         | 美術科教育におけるコンピュータ上の色彩の問題点<br>小城市牛津中学校/中村学園大学<br>姉川明子/姉川正紀               | 高等学校芸術(工芸)の新学習指導要領に準拠した題材開発実践<br>東京学芸大学附属高等学校<br>尾澤勇 |
| 3 | 工作・工芸教育におけるデザイン的思考<br>長岡造形大学<br>佐藤真帆          | 子どもの美的経験における比喩的イメージの活用と課題<br>東京学芸大学附属小金井小学校<br>立川泰史                   | 現代中国の内モンゴルにおける美術教科書掲載の工芸作品に関する考察<br>宇都宮大学大学院<br>秀琴   |
| 4 | 造形活動における相互行為分析の視座(3)<br>聖徳大学<br>奥村高明          | デジタルメディアを取り入れた授業の一考察<br>慶應義塾大学大学院<br>直井崇                              | 教科書題材「造形遊び」に関する一考察<br>宇都宮大学教育学部4年<br>多胡慎平            |
| 5 | 造形表現の喜びやよさを味わい直すための手だてに関する一考察<br>東洋大学<br>北澤俊之 | ニューヨーク在住と九州在住の日本児童の実態と図画工作学習に関する考察<br>学校法人西南学院小学校<br>樋口和美             | 小・中における抽象絵画指導からの一考察<br>桜の聖母学院中学校<br>相馬亮              |
| 6 | 美術教育における日常生活の概念に関する考察<br>宇都宮大学<br>本田悟郎        | 中学美術授業における映像表現の可能性<br>新潟市立潟東中学校<br>甲田小知代                              | 図画工作科における表現力の向上を図るための授業の実践<br>守谷市立松が丘小学校<br>小林優子     |
| 7 | 戦後の美術科教科書における掲載作品の研究(13)<br>宇都宮大学<br>山口喜雄     | Seraphina Lenz の『Werkstatt für Veränderung』について<br>名古屋市立白鳥小学校<br>中村仁美 | 阿部七五三吉の手工教育論における教科課程案について<br>東京学芸大学大学院<br>平野英史       |
| 8 | 発想の教育 一私の点声塵語(天声人語)<br>筑波大学名誉教授<br>高山正喜久      | 三陸の風景とコミュニケーションしよう<br>釜石市立大平中学校<br>山岸弘一郎                              |  |
| 9 | 多様なイメージと相互理解<br>福島大学<br>天形健                   | 鑑賞活動に見る子どもの成長に関する一考察<br>渋谷区立加計塚小学校<br>藤崎典子                            |  |

### 2. 日本美術教育研究論集について

研究論集編集委員長 小林貴史 (東京造形大学)

本年度発行を予定しています日本美術教育研究論集第45号では、昨年の研究発表会にて発表された中から16名の方の研究論文ならびに研究報告、研究ノートの掲載を予定しています。論文の内訳は、A群(理論・実践研究論文)が8、B群(実践研究報告・研究ノート)が8となっています。ご投稿された方々には、たいへん限られた日程の中、ご協力いただき感謝しております。現在、年度内に皆様のお手元に届くことを目指して編集作業を進めておりますので、どうぞご期待ください。

## 選挙管理委員会報告

### 役員の改選について

平成23・24年度役員改選

選挙管理委員会 委員長 藤崎典子

公益社団法人 日本美術教育連合 定款25条により役員の任期満了にともなう選挙は、理事会により選出された選挙管理委員長 藤崎典子により、平成23年11月19日現在の有権者に同年同月20日に投票用紙を発送し、同年12月12日当日消印有効を締め切りとし、同月18日渋谷区立加計塚小学校に於いて開票作業を行った。立会人は前田正子会員にお願いした。オブザーバーとして宮坂元裕理事長が参加した。藤崎が投票用紙を読み上げ前田氏と宮坂氏がカウントし、数が一致したので、全ての資料を封入封印して終了した。平成24年1月28日理事会、運営委員会合同委員会の席上開封し、実名と票数を合わせ、当選を決定した。

有権者数 195名、投票総数 65票、無効投票数 1票、有効投票数 64票

その結果以下ようになった。

理事の候補 宮坂元裕 40票、大坪圭輔 36票、水島尚喜 35票、山口喜雄 33票 以上

理事候補（補欠） 小林貴史 31票、西村德行 31票、藤崎典子 31票

上記の結果、平成23年11月13日開催の理事会 第2号議案に於いて第5位を理事候補とする。得票数が同数の場合は該当者の話し合いで決定する。の議決に従い、上記3者で話し合った結果、理事候補（補欠）の候補は小林貴史とした。以上は平成24年4月22日（日）開催される通常総会に於いて決定される。

## 事務局便り

公益社団法人 日本美術教育連合 発行

# 日本美術教育研究論集 第45号

**2012年3月末日 発行します！**

公益社団法人日本美術教育連合では、毎年「日本美術教育研究発表会」を、文部科学省の後援を得て開催しております。この発表会で提案・報告された美術・造形教育に関わる研究・実践の数々が1冊の研究論集となり会員の皆様および関係諸機関に届けられます。それが『日本美術教育研究論集』です。多角的・先進的な研究、日頃の実践に裏打ちされた貴重な報告などが1冊にまとめられた内容の濃い論集です。

本年度も昨年度に引き続き、年度末（2012年3月末日）に発行する運びとなりました。

どうぞ御期待ください！

Japanese  
Journal  
Art  
Education

日本美術教育研究論集  
45



デザインは若干変更される場合があります。

### ■平成23年度(2011年度)会費納入、ご協力ありがとうございます

昨年10月の「第45回日本美術教育研究発表会」、埼玉北本市立東中学校での中学校美術授業研究会、11月に武蔵野美術大学新宿サテライトでおこなわれた「造形・美術教育フォーラム」等の開催により、それぞれ大きな成果をあげることができました。

本年度も、会員皆様のご理解とご協力を多く受けることができ、会費の納入状況が改善されました。しかしながら、まだ納入いただいていない会員もいらっしゃいます。是非、ご入金のご協力をお願いします。尚、3年連続会費未納入の会員は「退会」という対応をいたします。

何卒、ご理解とご協力を引き続きお願い申し上げます。

未納の方は！

平成23年度会費 **5,000円** を納入してください。

日本美術教育連合 郵便振替 00170-1-86036

\*納入期限：平成24年3月19日(月) (本年度会計を閉めます)

■お問い合わせ先:事務局 筑波大学附属小学校図画工作科研究部 西村 德行  
〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 筑波大学附属小学校  
TEL+FAX 03-3946-1962 (直通)  
E-mail tnishimura@elementary-s.tsukuba.ac.jp

### ■平成24年度 通常総会 予告■

巻頭ページでもご案内いたしましたように、第2回通常総会を平成24年4月22日(日)に開催いたします。多数ご出席いただきますよう、宜しくお願いいたします。

■日 時 平成24年4月22日(日) 13:30~

■場 所 聖心女子大学(400番教室) 東京都渋谷区広尾4-3-1

(東京メトロ日比谷線「広尾駅」下車2番出口から徒歩3分)